

「Vである」構文について ―構文と文法化の視点より―

1. 本発表の趣旨

現代日本語のアスペクトは「ている」を基本形式とし、有生・無生を主語とし、行為者の側から行為の進行や結果状態を表す。これに対し、「である」は無生の対象の側から行為の結果状態を語る限定的なアスペクト形式である。

「である」には3つの類型がある。

A類型：「N（対象）が V_t（他動詞）である」（本が置いてある）

B類型：「N（対象）を V_t（他動詞）である」（店を予約してある）

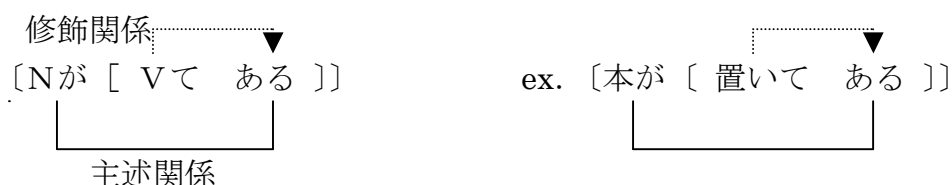
C類型：「(N(行為者)が) V_i（自動詞）である」（試験に備え充分眠ってある）

益岡(1989)は、A類型を「対象の状態を行為と結びつけて記述」する文とし、更に A1（行為の結果としての物の存在）と A2（対象の状態変化が可視的に継続）に分ける。B類型（C類型を含む）は「行為の結果が基準時に関与することを表し」、更に B1（対象に状態が残る）と B2（行為の効果が残存）に分ける。

認知言語学では「形式が異なれば事態の捉え方が異なる」と考えるが、これまでの先行研究は記述的な意味分析が主で、形式（構文）や文法化の違いを強くは意識していない。特にA Bの違いが重視されないのは、日本語では「水が／を飲みたい」のように対象をガ／ヲの両方で表現することがあるためと思われる。本発表は3類型（特にA B）の意味・用法は構文と文法化の違いから説明できることを主張する。A Bは「対象になされた行為の結果残存」を表す点では同じだが、Aは対象を「ガ格（主格）」で捉えた「存在に焦点を当てた形式（→存在文）」で、Bは対象を「ヲ格（対格）」で捉えた「行為に焦点を当てた形式（→行為文）」と考える。なお、C類型は行為者の側から事態を述べる点で「である」の中では特殊である。

2. 各類型の形式と意味

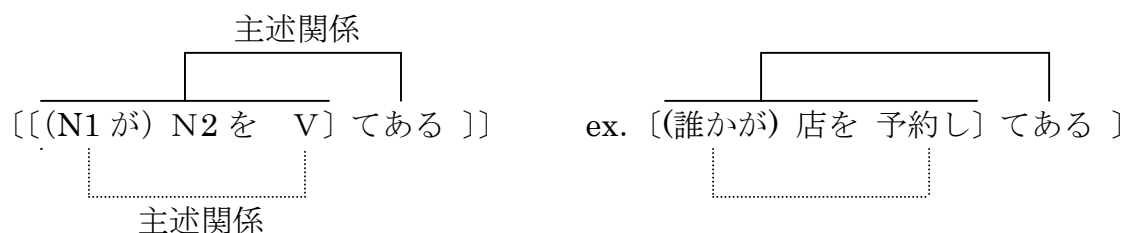
2.1 A類型



〔本が〕に対応する動詞（本動詞）は〔ある〕で、置く（*本が置く）ではない。〔置く（置いて）〕は〔ある（存在）〕の様態を修飾する副詞的な語となって

いる。「てある」は存在の意味を残し、完全には補助動詞化（文法化）していない。Nに来るのは原則として無生でかつ具体的なものである。Vは存在に関わる他動詞（存在の発生・消滅および状態変化を表す他動詞）に限られる。なお、A類型は他動詞の対象をガ格で捉えた受動文的な性格を持つ。また存在文であるため場所の修飾語を補うと安定する。

2.2 B類型



全体が複文的な構造で、ヲ格で表される〔店を〕に対応する動詞は「予約する」で、〔ある〕ではない（*店をある）。本動詞はVで、「てある」は（「ている」等と同様）補助動詞化（文法化）し、事態全体の存在を表す。広く行為を表す文であるため、N2にもVにもA類型のような制約はない。また、行為を焦点化するため、行為の目的性を併せて含意することが多い。

2.3 C類型

自動詞をとる点がABと異なるが、構造と意味はBに近い。行為の効果が（対象を欠くため）行為者に残る点が特徴的である。

2.4 各類型の関係

3者には類似点もある。状態変化動詞のAは（存在と同時に）行為にも焦点が当たるため意味的にBに近くなる。また、Aは（文脈を与えれば）Bに置き換えるが、Bは常にAに置き換えられるとは限らない。またBの一部にはC同様、行為者に行為の効果が残るものがある。

3. 通時的考察（文法化）

「ある」と「いる」の関係と同様、「てある」は「ている」に歴史的に置き換えられていった。古代語の「たり（て＋あり）」が文法化し、有生・無生のアスペクト形式「てある」が発達したが、近世以降、有生の「いる」、無生の「ある」の棲み分けを基に再度の文法化が進んだ（金水 2006）。その後の変化は以下のように考えられる（坪井 1976）。

ている	てある
	<p>①木が倒れてある (自動詞) └───────────▶ ③C類型 (良く寝てある)</p> <p>②木が倒してある (他動詞) └──────────▶ ④A類型 (存在文)</p> <p>↓ガ→ヲ交替 ⑤木を倒してある (B類型)</p>

近世初期は無生物の行為・状態を表す自動詞の①が多く見られるが、「ている」の発達によりそこに吸収され、現在は③(C類型)を例外として残すのみである。他動詞の②は(近世以前は無生物主語の受身文が難しかった間隙を埋める意味もあったが)近代以降は通常受身(られる)文に置き換えられ、現在は「存在」に限定された④(A類型)が残っている。⑤(B類型)はガ→ヲ格の交替によって使われるようになり、存在に限定されない「行為文」として適用範囲を広げたが(「ておく」等と比し)使用頻度は高くない。 以上(約1900字)

【主要参考文献】

- ・尾上圭介(2004)「主語と述語をめぐる文法」、『朝倉日本語講座6、文法Ⅱ』朝倉書店
- ・大場美穂子(1996)「「～てある」について」『東京大学言語学論集』15
- ・梶井恵子(1997)『日本語の機能表現形式―「て形」のすべて―』凡人社
- ・金水敏(2006)『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房
- ・工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- ・杉村泰(1996)「形式と意味の研究―テアル構文の2類型」『日本語教育』91
- ・高橋太郎(1976)「すがたともくろみ」金田一春彦『日本語の動詞とアスペクト』むぎ書房
- ・谷口秀治(2000)「「～ておく」に関する一考察」『日本語教育』104
- ・坪井美樹(1976)「近世のテイルとテアル」『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論文集』表現社
- ・寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味 第Ⅱ巻』くろしお出版
- ・原沢伊都夫(1999)「てある能動型の主体性の欠如について」『言語』28巻-9号
- ・益岡隆志(1989)「てある構文の意味領域」『命題の文法』くろしお出版
- ・森田良行(1977)「～(て)ある」「～(て)おく」『基礎日本語』角川書店
- ・山崎恵(1996)「「～てある」と「～ておく」の関連性について」『日本語教育』88
- ・吉川武時(1976)「現代日本語動詞のアスペクトの研究」、金田一春彦『日本語の動詞とアスペクト』むぎ書房
- ・渡邊績央(2004)「[対象]ガ～テイル」構文について」『東京大学言語学論集』23
- ・Dixon R.M.W.(1979) *Ergativity* Cambridge University Press